

●岩松了

『憑依』は、岡田利規氏の影響が露骨すぎて、どうしてもマイナス点を用意するが、読み進めるうちに、作者独自の視点が読みとれるようになり、これは作家として苦しむべきことをちゃんと苦しんでいるという感想をもつ。姉と弟の受難に迫る迫り方が執拗な想像と文学性すら感じさせる表現力で、読む者を個人的な迷路に誘いこむ。一見本筋に関係ないかに思えるトンボの死についても、その事実には粘着するがゆえに、それが幹となるテーマに帰属してゆく時。確かな旋律であったとの感想をもつ。眼球へのこだわりが、作者自身消化出来てとは思わないが、それでもそこに挑もうとする姿勢は評価したい。

『家出』は、平易な言葉をあやつり、男女の高校生の謎めいた時間をつくりだした傑作である。この作者はぐだぐだと心情を説明するという労力から遠いところにいる。エアコン、飴、富士山、新富士駅で千円返す、などの臭体が突拍子もなくあらわれ、確かなイメージを伝える。それによって逆に心情を説明出来ているのだ。心の揺れを、心情に入りこまずして表現する。その才能は今後どうなってゆくのか興味深い。

この二作を授賞作としたのは選考委員全員が甲乙つけがたいと判断したからだ。

●中島かずき

議論の中心になったのは、谷岡紗智さんの『家出』と川津羊太郎さんの『憑依』に関してだった。

川津さんは前回も『妄膜剥離』という作品で最終選考に残っている。そのイメージの喚起力や人物像の新鮮さ、言葉のチョイスのセンスなど他の作品をぬきんでいる部分は多く、大賞候補作として論議された。但し、そのスタイルがあまりにもある作家に似ているため結果的に見送りになった。

懇親会で川津氏に会い、その作家の影響を受けて初めて書いた戯曲だと聞き、改めて得心がいった。

今回の『憑依』は、一読して、戯曲としての表現スタイルを模索している印象を受けた。

姉と弟の悲劇的な関係を独白を中心として語るその言葉の強さ、小説で言えばリーダビリティに関しては今回も健在だ。ホラー小説を読むように読み進めた。その求心力は健在だった。

だが特定の作家からの影響を脱するために、自分のスタイルを探してあがいているという風に見えた。作品としては迷いが無い分、前回の方が統一感があったかもしれない。

発展途上であり、書けば書くほどのびる人なのだろう。そういう印象を持ったので、今の段階で賞をあげることに戸惑いもあった。

谷岡さんの『家出』は、多分上演すると3～40分で終わる小品だろう。

高校生の男女が出会う軽い会話の中に生死が浮かび上がる。その言語感覚の面白さは審査員全員が認めるところだった。

その手触りは面白いし、長くなければ駄目だというわけではない。ただ、作者が書きたいものだけを書き、そこで終わらせたような印象を受けるこの作品が、大賞にあたるかどうか議論となった。僕自身、佳作ならば文句なく推すが、大賞となるとどうだろうという戸惑いがあったのは事実だ。

『憑依』も『家出』もともに作家への期待感も含めた論議になったが、結果的に両作品とも大賞という形で決定した。

どちらの作品も、まだ上演されていない作品だ。

大賞作はリーディング公演が行われる予定なので、両作家が自分の作品が役者の肉体を通じて立ち上がる経験をすることが、また新しい劇作の刺激になることを期待する。

●古城十忍

受賞作なし、となってもやむを得ない。そう思いながら選考会に臨んだ。それほどに今年の最終候補の5作には、残念ながら強く心惹かれる作品がなかった。

最も興味深く読んだのは、川津さんの『憑依』だった。川津さんは昨年、『妄膜剥離』でも大賞候補に挙げたが、その語り口があまりにも先行する劇作家に似ていたため、「オリジナリティとは何か」という議論になり、結局は受賞に至らなかった。

今年の『憑依』はなんとしてもオリジナリティを獲得しようと努力した跡が随所に窺えたものの、その一つ一つが私にはうまく絡み合っているように思えず、まだまだ発展途上にあるように思えた。例えば、上演中にライブで撮影するように指示されている映像は物語の展開にさほどの必要性を感じなかったし、さまざまな役割で登場する「黒男」「白女」の存在も、むしろ作品世界を無駄に拡散させているように思えた。さらに、昨年の『妄膜剥離』がラストシーンに向かって物語を突き抜けていき、ぞくぞくするような高揚感を獲得していたのに対し、今年の『憑依』はひたすら暗く重い方向へ進んでいくだけで、最後まで思わせぶりのホラー映画のような手触りが反転することはなかった。

ただ、それでも全編を通して印象に残る場面は少なくなく、読む者の肉体の内部に食い込んでくるようなリアリティのある表現も数多く見られた。

そういう意味では、5作品の中で劇作家としての格闘の痕跡を最も戯曲に落とし込めていたのも『憑依』であり、川津さんの将来への大きな期待も含め、大賞受賞作とすることに異存はなかった。

谷岡さんの『家出』はセリフの展開のさせ方に無駄がなく、読む者がある世界に導きながらそれを次々に裏切っていく手法も面白く、作劇上のうまさを感じさせる。

ただ『家出』は上演すれば恐らく30分程度の作品で、戯曲の長さは受賞を左右する大きな問題ではないと思いつつも、あまりに小品すぎて、この作品で大賞受賞とすることは私には大いにためらわれた。確かに劇作家としての才能は感じるものの、それをあまりに過大評価しすぎていないかと躊躇する思いを拭えなかった。

できればもう少し骨太の作品を待ってから受賞を決めてもいいのではないかと思つたが、こちらも将来への期待を込めて、他の審査員が大賞に推す声に反対はしなかった。

毎年、最終候補に挙がる川口さんの『グンナイ』は、なんとか新たな世界を押し広げようとする苦悩があちこちに見てとれたが、どうも袋小路に入ってしまったような気がする。

この作者はワンシチュエーションで次々に小事件を起こし、それを笑いに転化させていく筆力は相当にあるのだが、『グンナイ』ではその得意技も鳴りを潜めてしまった。

川口さんの突破口は恐らく、笑いを封印することではなく、舞台となるシチュエーションの外側では何が起きているのか、その内と外との関係にまで目を向けることにあるのではないかと思う。引き続き、今後の作品に期待したい。

●横内謙介

『家出』における谷岡紗智さんの言葉のセンスが光っていた。短編で登場人物も少なく、これを受賞とするには早計かとも思えるが、その小さな世界の中でイメージを豊かに広げてみせた才能に、大きな期待を込めて一票を投じた。

逆に『グンナイ』の川口大樹氏には、第一回目の時に見送らず、賞をあげておだてるべきだったと反省する。以前光っていたリズム感や疾走感が作品から消えてしまったのがとても残念だ。才人が迷い悩んでいる感じが辛い。しかしそういう迷路から抜け出した時、才能は本物になるものでもある。更なる期待を込めて彼の復活を待ちたい。

川津羊太郎氏の『憑依』は、書き抜く力に圧倒される。いろんな影響が雑多に入り込んでいて、作者独自の世界が現れているとは思えないと感じたが、簡潔すぎる『家出』に対し、戯曲執筆に対するこの情熱を無視出来ぬという他の審査員の強い支持があり、そこに異論はなかったので同時受賞に賛成した。

松野尾亮氏の『おわせてくれよ！』は兄弟というリアルな関係を中心に据えているのに、話の展開にリアリティが欠け過ぎていると感じた。福田修志氏の『Cargo』はユニークで秀逸な発想を、演劇的な構造の中で生かし切れていないと感じた。

●松田正隆

私は『家出』と『憑依』を推した。

どちらもとても面白かった。

『家出』は単純な構造の二人芝居だが、とにかくセリフのやりとりが秀逸だった。幼い子供たちが世界のおそろしさにむかって自分の領分を保つため、くりかえしごっこあそびをする。そんな感じだった。カオスの瀬戸際でのリトルネロ、である。ラストの赤ん坊をどのように考えるかで、評価が分かれるのだろうが、やはり、オチ、まとまりになってしまっている。ただ、この作品の持つセンスはやはり他を圧倒しており、好みで言えば、大好きな作品だった。

『憑依』は、『家出』のシンプルさに対して、複雑さを極めている。この作家の視線へのこだわりはハンパじゃないと思った。自意識の解体と構築。年表資料などの添付は、長期間にわたる執筆を物語る力作であり、そこに生まれた作品世界は相当異様なものである。劇作によって表象された死んだ母からの、姉の身体を通した弟の生まれ直しの物語というのは、当然、男性作者自身の精神治療を思わせる。そういう意味では、複数の位相の並走するカーニバル的な時間性を持たず、結局、単純な物語に回収されるのではと当初は思っていたのだけれど、ひとつひとつの描写セリフの孕む言葉の「かたさ」は到底噛み砕きようもない。複雑そうでまとまりのある作品という印象だったのが、しっかり読むとそうでもない、やっぱり、ちょっと変、まとまらないじゃないか、という感じだろうか。それがこの作品のわけのわからない不気味さをあらわしている。